

AUTUMN/2023

VOL.99

発行/(公財)東京都人権啓発センター

誰もが幸せを実感できる社会へ

TOKYO 人権

マイノリティのビジョン



「インクルーシブシティ東京プロジェクト」が 新たにはじまります

東京都人権プラザでは、障害当事者を起点とする発明に主眼を置いた
「発明プロジェクト」を展開してきました。

今回新たに「インクルーシブシティ東京プロジェクト」として、
特別展示コーナーをリニューアルし、「セサミストリート」を起用した、
子どもの権利をテーマにした展示を行います。

また、新たに若年層を対象とした参加・体験・交流型の学習プログラム等を展開し、
「インクルーシブな社会に導く・支える人」の育成を進めます。



特別展示

子どもの権利をテーマに、「セサミストリート」
のキャラクターをガイド役に起用した展示

参加・体験・交流型学習プログラム

ユース世代向けコース

ワークショップとフィールドワーク
を取り入れた学習プログラム

指導者向けコース

ユース世代に接する人たちを対象
に、人権教育の基礎を学ぶセミナー

詳細、実施時期及び今後の関連企画につきましては、決定次第、ホームページ等でお知らせいたします。

東京都が掲げる 17の人権課題

●女性 ●子供 ●高齢者 ●障害者 ●同和問題（部落差別） ●アイヌの人々 ●外国人 ●HIV感染者・ハンセン病患者・
新型コロナウイルス感染症等 ●犯罪被害者やその家族 ●インターネットによる人権侵害 ●北朝鮮による拉致問題
●災害に伴う人権問題 ●ハラスメント ●性自認 ●性的指向 ●路上生活者 ●様々な人権課題（順不同）

YouTube / 公財・東京都人権啓発センター

主催事業等に関する動画をアーカイブし、YouTubeの公式チャンネルで公開しています。
是非ご覧ください。



動画の一例

第5回人権問題都民講座「文学から考える戦争と平和—現代ロシア語文学の場合—」／令和4年度指導者養成セミナー「水平社100年をどう教えるか」



公益財団法人
東京都人権啓発センター
TOKYO METROPOLITAN HUMAN RIGHTS PROMOTION CENTER

〒105-0014 東京都港区芝2-5-6
芝256スクエアビル2階
TEL 03-6722-0082（総務課）
FAX 03-6722-0084
<https://www.tokyo-jinken.or.jp/>



東京都人権プラザ
TOKYO METROPOLITAN HUMAN RIGHTS PLAZA



（公財）東京都人権啓発センターは東京都人権プラザの指定管理者です。

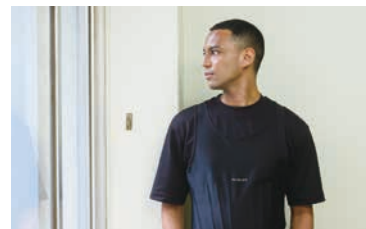
TOKYO 人権

目次 CONTENTS

3 INTERVIEW

作品が評価されても、差別される
当事者に届かなければ意味がない

小説家 安堂 ホセ さん



7 子ども向け企画

きみは、知ってる？

「パラリンピックの父」グットマン博士

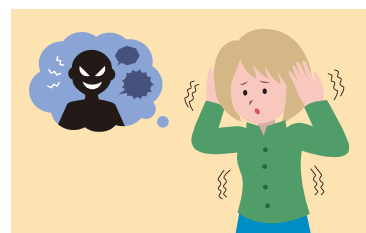


8 外見からはわからない障害を知ろう

知っていますか？「精神障害」

人権カルチャーステーション

〔評者〕目白大学専任講師 山中 智省 さん



9 特集

「新しい時代の女性支援を見据えて」

一性暴力や虐待などに苦しむ女性の保護

10 JINKEN note

セサミストリートが東京都人権プラザにやってくる



毎週土曜日
放送中！

蓮見孝之
まとめて！
土曜日

毎週土曜日 朝 7時～8時45分



(公財)東京都人権啓発センターでは、身近な人権をテーマとして、リスナーに分かりやすく取り上げる人権啓発ラジオ番組を提供しています。

人権
TODAY

最近の放送テーマ 高齢化する中国残留邦人が主に利用する、中国語対応の泊れる介護施設／マクドナルドで働くダウン症の高校生

番組名 | 人権TODAY「蓮見孝之まとめて！土曜日」内のコーナー
放送局 | TBSラジオ FM90.5MHz／AM954kHz
放送日時 | 毎週土曜日 朝8時20分頃から5分間
キャスター | 蓮見孝之さん、北村まあささん



作品が評価されても、差別される 当事者に届かなければ意味がない

あんどろ
小説家
安堂 ホセさん

映画への傾倒から、

「映像のような小説」が生まれた

自分が創作を志した動機は、世の中に
なにかを訴えたいという気持ちよりも、
創作を通じて、自分の内面にあるビジョ
ンを具体化したいというような欲求だっ
たと思います。もちろん、世の中につい
て思うところがなかったわけではありま
せんが、2010年代の日本に身をおい
ていると、マイノリティであることを前
提とした表現が伝わると思えず、諦め
ざるを得ませんでした。

表現の手段として、もともと関心が
あったのは映画でした。10代の頃は毎日
のようにレンタルショップで映画を借り、
映像の世界にのめり込み、いつか自分
でも映画を作りたいと考えていました。

しかし、映画の製作には大勢のスタッ
フが必要なので、商業作品ではない自主
製作となると、スタッフ全員にマイノリ
ティについての前提から、作品中のキャ
ラクターの行動の意味、そしてなぜそれ
を描きたいのかという私個人の動機まで
共有してもらう必要があり、「仲間を探
す」という点で圧倒的に不利でした。そ
のなかで、あるとき、「小説なら一人
自由に創作できる」と気がつきました。

2022年に発表した小説『ジャクソ
ンひとり』は、「映像を観ているような
小説」「映画のシナリオのようだ」とい
う感想を多くいただきました。映像に夢



あんどう・ほせ

1994年東京都生まれ、在住。28歳。『ジャクソンひとり』で第59回文藝賞を受賞しデビュー。第168回芥川賞（1月19日発表）の候補作にもノミネートされた。

『文藝』2020年秋季号の特集「覚醒するシスターフッド」に感激し、初小説『赤青坂黄色闇』を第58回文藝賞に応募。最終候補に残るが惜しくも落選。晴れて今年本作で同賞を受賞し、デビューを果たす。映画好きで、自ら製作も手がけたが、「一人で気が済むまで作れる表現の方が合っている気がして」シナリオから小説に移行。

マイノリティとして 表現すること を 諦めざるを得なかった

中だった経験から、物語を組み立てる土台が映像式になっているのだと思います。もしかすると私の小説の中では映像的なビジョンが主役で、言葉はそのビジョンを伝える補佐のような役割を果たしているのかもしれない。

生き方を示唆された 小説家との出会い

小説家で最も影響を受けたのが川上未映子^{えいこ}さんで、小学生の頃から読んでいます。デビュー直後の川上さんの作品には、現在の作風とはまた異なる、実験的な詩作などもありました。それらの作品のすべてを幼い頃の自分が理解できたわけではありませんが、それでも強く惹きつけられました。

川上さんの著作や生き方から学べることは沢山ありました。自分が内面で抱えているものへの向き合い方、極め方などでそれを生業にできる可能性があることを知りましたし、人生で納得のいかないう事態に直面しても、この人のフィルターを通してなら楽しめるのではないかと

と感じたこともありました。

結果的に 小説を書くことが向いていた

初めて小説を書くかと思っただけは、大人数でひとつのものを製作することの困難を感じ、自分一人で創作できる表現手段を選んだという消極的なものでした。

しかし、小説を書いていくうちに、言葉は最初の着想を超えて、より深くまで表現できることがわかってきました。例えば私の小説ではコアになる事件が登場することがありますが、事件は、それ自体はひとつの現象に過ぎないから、ふつうは報道やSNSを通じて多数決的な解釈に固定されていきますよね。いくら現象そのものにインパクトがあっても、ただそれを記録しただけではあつという間に多数派に意味付けをされてしまう。そのとき、映画のようにカットワークや俳優を通して物語を説明するより、言葉を使って描写そのものに自分の解釈を流しこむほうが、私には向いていたのだと思います。

マイノリティ表象が評価されるとき 誰がそれを消費しているのか

「LGBTQ」と包括される性的マイノリティ（少数派）については、少しずつ周知されるようになってきました。私

の小説を含め、映画やテレビドラマなどの物語にも題材として扱われることが多くなりました。しかし、それらの物語が本当に当事者に届いているのかは疑問があります。

最近話題になった、ゲイの男性を主人公にした映画でも、インターネット上で感想を読む限りでは、主演俳優のファンが「ほっこりした」とか、「演技力がある」というような感想を語っているものばかりでした。作品が話題になるだけでは、マイノリティの当事者にとって、なんら見返りにならないケースも多いですし、そもそも尊厳や権利も保たれていないのにほっこりなんてさせたくない(笑)。

そのような作品が、マジョリティ(多数派)の人々のあいだでいくらかもてはやされても、当事者が渴望するような作品であるかどうかは全く別の問題です。

「黒人」という言葉に代わる 日本語はなぜないのか

『ジャクソンひとり』の作中で、登場人物が「黒人」という言葉を問題視するセリフがあります。日本語では「黒人」や「白人」という言葉が使われる一方で、「黄人」なんて言葉はありませんから、「黒人」という日本語は、英語の「Black」とはイコールではない。いわば、「黒人」はマジョリティが自らの存在や属性を棚上げして、他者を指し示す言葉です。この

ような視点の提示に対して、必ず「じゃあ、どう呼べばよいのか」という反論がされます。「代案のない批判だ」ということですね。しかし、ここで考えなければいけないのは、代わりの呼び方が存在せず、ほかに呼びようがない事態がずっと変わっていないのは何故かということです。

これは、日本語が、ある種の属性を持つ人を、差別せずに表現することができなくなっているからではないでしょうか。例えば、「ご主人」や「奥様」といった言葉も、男性を優位に、そして、女性を劣位に置く性差別的な力関係を前提にしていますよね。このように、言語の構造の中に差別が組み込まれていること、さらにそのことに全く不都合を感じていない人が圧倒的に多いことを示しているのではないのでしょうか。

小説には、既存の言葉に、膨大な描写を通じて新しい概念やイメージを付け加えられる可能性があります。例えば日本語で「ジャクソン」と聞いたとき、大多数が真っ先に思い浮かべるイメージの中に、『ジャクソンひとり』が新しい何かを付け加えられるとしたら、それも小説のやりがいなのかもしれないと最近は考えています。

代弁することが 乗っ取りになっていないか

当事者が当事者の視点を用いて小説を

書くだけで、ある属性を代表しているかのように見えがちです。そのように見られることが増えるにつれて考えるようになったのは、誰かの立場を代弁しようとする行為は、ともすればその「誰か」の立場やその考えを横取りすることになりかねないということです。

人権運動の歴史を見ても、マイノリティのなかでも更にマイノリティとされる人々が掲げた主張やスローガンを、もう少し大きなコミュニティが横取りしてしまうことがあります。

たとえば、性的マイノリティの人々を侮蔑する意味合いを含んでいた「クィア」という言葉から、その否定的なニュアンスを取り除いたのは、まさに差別を受けている人々でした。異性愛やジェンダーバイナリ(男と女に二分すること)を規範とする社会に対して、自分たちを言及する際に、肯定的に、かつ過激に表す言葉として「クィア」と自称するようになってさうです。

しかし、個人が自身のことを「私はクィアだ」とは言えても、例えば、LG B T Qのなかでシスジェンダー(出生時の身体の性をもとに割り当てられた性と自認する心の性が同一である人)ばかりの団体を指して「クィアの団体」とすると、本当にそうとしか名乗れない誰かへの乗っ取りになっている可能性がありますよね。

アメリカのプライドパレード[※]の歴史に

おいても、白人男性層が主導権を握って有色人種を排除したり、社会に受け入れられやすくする目的でマイノリティ内のトランスジェンダーを差別したりしたケースがあつたといえます。

誰かの代弁をしているつもりでも、逆にそうした人の語りや居場所を横取りしていることになっていないかということは、自分の活動についても気にしています。

一人の読者のなかに 複合的な視点があつた

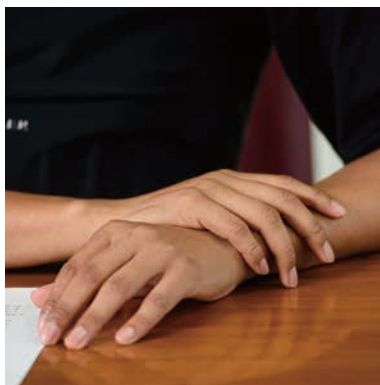
『ジャクソンひとり』に、さまざまな人々からの反響があつたことには驚きました。この作品を出版した当初は、ほとんどの読者には受け止められず、無視されてすぐに消えると思っていました。日本国内の読者の多くはこの物語について「非当事者」、作中でいえば「モブ側」なのではないかと思っていました。

けれど実際には、部分的に共感したり、別の部分に新鮮さを感じたり、あるいはジャクソンたちとは全く別の立場にいるはずなのに同じような絶望に陥っている方もいたし、一人の読者のなかにも複合的な視点があることがわかりました。作品についての感想はあまり臆せずによく検索しています。

とはいえ、当事者の人に読んでいただくことにはいつも緊張感があります。今

※ 性的少数者の存在や人権を訴えて街道を練り歩くアピール。性的少数者の社会運動の場となってきた。

日本語という言語の構造の中に 差別が組み込まれている



『ジャクソンひとり』
安堂 ホセ 著 (河出書房新社)

回、性的・人種的マイノリティの読者に「こういう小説をもっと読みたい」と渴望してもらえたことが本当に嬉しかった。

前例のないことをすると、はじめは必ずその一例が全体の総意であり結論であるかのような構図を作られがちです。現実には理念ではないので『ジャクソンひとり』が反響の面で失敗してしまえば、出版社が同じ属性の作家を「売れない」と判断し、今後もっと優れた作品が出てこなくなることもあり得る。これは綺麗事ではなくて、自分の次回作が出せなくなる可能性にも直結しています。

最近知り合った、書店に勤めている若い人がいるのですが、その人は政府関係者によるLGBTQへの差別発言が問題になったとき、それを批判する立場から関連本を集めた特設コーナーを作っていました。自分の職業的な役割のもとで闘うことを恐れない人がいて、そのように、それぞれの場所で闘っている人にはいつも力づけられています。

小説を書いたことで 新たに人と出会った

小説を発表したことをきっかけにさまざまな人と会い「こんなことが実際に起きるのか!」と驚くことも沢山ありました。音楽でもダンスでも、創作をしている当事者と出会って、お互いの創作物を分かち合えるのは本当にうれしいです。やつ

と夢が叶ったと感じますし、自分の新しいモチベーションにつながっています。

業界内での個人的な達成も大事だけれど、「誰がそれを評価しているのか」を考えたとき、マジョリティからのフックアップ(有名な人物が無名の状態である者を自分の発信力を使って広く紹介し、自分と同じように有名にすること)を待つのも少し寂しいし、マイノリティ間だからこそ共感や齟齬(そご)をやりとりできる人が業界にいてくれたら心強いなと思います。

このインタビュ어가掲載される頃には、文芸誌に小説の新作が発表されているはず。とてもやりがいを感じた作品で、当事者の方も、それ以外の方もきっと楽しんでもらえると思います。

インタビュ어 村上 由鶴・田村 鮎美(東京都人権啓発センター専門員)／編集 杉浦 由佳／撮影(表紙・2〜6ページ) 百代

安堂さんのおすすめ書籍



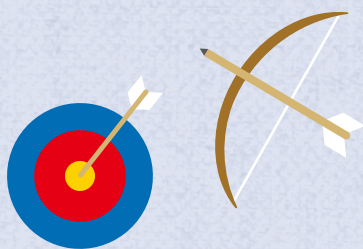
右／『感受体のおどり』黒田 夏子 著 (文藝春秋)
左／『夏物語』川上 未映子 著 (文藝春秋)

きみは、 知ってる？

「パラリンピックの父」 グットマン博士

1948年、イギリスのストーク・マンデビル病院で開かれた、参加選手わずか16人のアーチエリート大会がパラリンピックの原点と言われています。

グットマン博士はなぜ、この大会を開いたのでしょうか？

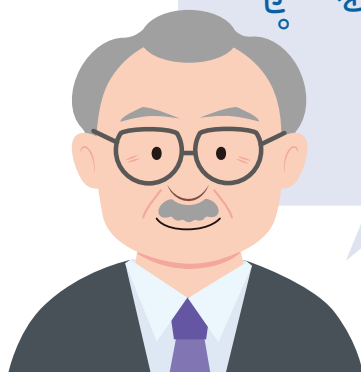


グ

グットマン博士は、ドイツで生まれたユダヤ人で、第二次世界大戦中のナチスによる迫害からイギリスに逃れた医師です。イギリスのストーク・マンデビル病院で、戦争でけがをした兵士の治療を行っていました。当時の患者の多くが脊髄損傷という障害を負っており、ベッドから起き上がることもできず、生きることに絶望していました。

そこで、グットマン博士はリハビリテーションとして「スポーツ」を取り入れました。

失われたものを数えるな。
残されたものを
最大限に生かせ。



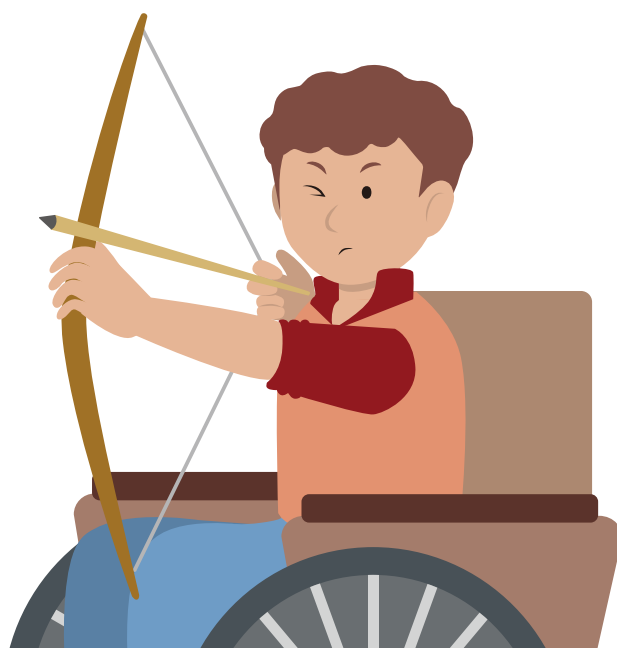
ルートヴィヒ・グットマン博士

患者たちは、バスケットボールやアーチエリートなどをする中で、体力的にも精神的にも回復し、生きる意欲を取り戻していきました。



もっと
知りたい
ときは

『パラリンピックは世界をかえる ルートヴィヒ・グットマンの物語』
(ローリー・アレクサンダー 著／アラン・ドラモンド イラスト／
千葉 茂樹 翻訳／福音館書店)



知っていますか？

せいしんしょうがい 精神障害

せいしんしょうがい せいしんしっかん せいしん き のう しょうがい
精神障害とは、精神疾患のため精神機能に障害が
しょう にちじょうせいいかつ しゃかいさん か こんなん
生じ、日常生活や社会参加に困難をきたしている
じょうたい のことをいいます。びょうじょう しんこく
状態のことをいいます。病状が深刻になると、判
だんのうりよく こうどう
断能力や行動のコントロールが著しく低下するこ
とがあります。

たと
例えば..

ひ がいもうそう げんちよう お とうごうしつちようしょう ゆう
被害妄想や幻聴などが起こる統合失調症、憂うつ
な気分や意欲の減退などといった気分障害、強い
ふ あん どう き こきゆう こんなんかん とつぜんしゅつげん
不安と動悸や呼吸の困難感などが突然出現するパ
ニック障害などがあります。

どんなことに困る？ (一例)

マニュアルどおりの内容を早口で説明されると理解が
できない。

どうしたらいい？

ていねい わ かり やすく 伝える よう 心がけ しましょう。

東京都福祉局ホームページ

(<https://www.fukushi.metro.tokyo.lg.jp/tokyoheart/shougai/seishin.html>) を参考に作成。

がいけん
外見からはわからない
しょうがい
障害を知ろう

人権カルチャーステーション

「人権の視点」をもつことで世界の見え方が変わる

Series-1

中高生向け
ブックレビュー

『ミモザの告白』

LGBTQ+



八目迷 著 くっか イラスト
小学館 (ガガガ文庫)
2021年～(既刊3巻)

「異質な他者」が揺さぶるあなたの無意識

成績優秀でスポーツ万能、女子からの評判も良い美少年の高校生・槻ノ木汐は、誰もが認めるクラスの人気者。そんな汐はある日突然、クラスメイトたちの前に女子制服を着て現れ、「今日から女子としてやっていきます」と宣言します。心と身体の性の不一致に悩んだ末、心にしがたって「正しく生きる」ことを汐は選んだわけですが、本作の舞台は一昔前の日本の田舎町。トランス・ジェンダーへの理解がまだ不十分な状況ゆえに、汐の

周囲は「異質な他者」の登場に混乱、拒絶、反発と、様々な反応を示します。一方、汐とは幼馴染ながら疎遠になっていた紙木咲馬と、クラスの愛されキャラ・星原夏希は汐に寄り添い、理解の道を模索し始めますが——。さて、読者のあなたは登場人物たちの行動に、いったい何を思うでしょう。そこで生じた戸惑いや共感の数々は、あなたが自覚しきれていないマイノリティに対する意識に、ハッと気づかせてくれるはず。

評者

山中 智省 (やまなか・ともみ) 目白大学専任講師

日本近現代文学、サブカルチャー研究。『小説の生存戦略：ライトノベル・メディア・ジェンダー』(青弓社、2020年、共編)など。

特集

「新しい時代の女性支援を見据えて」

—性暴力や虐待などに苦しむ女性の保護—



DVや性暴力被害、経済的困窮など、女性が抱える問題は複雑・多様化しています。心身共に傷を負った女性たちには、どのような支援が必要とされているのでしょうか。日本で唯一長期入所できる婦人保護施設「かにた婦人の村」^{※1}の名誉村長・天羽道子^{あまはみちこ}さん、施設長・五十嵐逸美^{いづみ}さんにお話を伺いました。

時間をかけて尊厳を取り戻す

千葉県房総半島の山と海に囲まれた自然豊かな場所にある「かにた婦人の村」。1965年の開設以来、性暴力や虐待により心身ともに傷ついた女性たちを、これまで約60年にわたり全国から、延べ1万4千人以上を受け入れてきました。知的障害や精神障害により、長期の保護と支援が必要なケースも多く、現在は20〜90歳代までの約40名が、共に生活を送っています。入所年数も、事情も、支援の

内容も様々です。

ここでは、農園、洗濯、パン焼き、陶芸、手芸など、自ら選んだ作業に取り組みます。作業と共同生活を通して、「自分はこういう作業だったらできる」と、女性たちは誇りや喜びを取り戻していきます。傷ついた女性たちにとって傷をいやすためには、とても長い時間と安心して過ごせる環境が必要です。天羽さんは「弱い者も強い者も、平等な人生・人権を持った者として、ともに生きていきましょう」と、半世紀以上にわたり女性たちの痛みに向き合ってきました。今でも、女性たちの尊厳を回復するため寄り添い続けています。施設長の五十嵐さんも「ひどい虐待を受けて入所し、最初は表情もなく、独り言ばかり言っていた人が、10年経つてみたらにこにこして落ち着いた生活をしている姿に、確実な変化を感じます」と話していました。

多様化・複雑化・複合化する女性が抱える問題

現在の婦人保護事業は、1957年に施行された売春防止法を法的根拠として、「性行又は環境に照らして売春を行うおそれのある女子」（要保護女子）の「保護更生」を図る事業として始まりました。しかし近年では、性暴力・性犯罪被害、家庭関係の破綻や生活困窮など、女性を巡る課題は多様化・複雑化・複合化しています。暴力被害など売春以外の問題を

抱えた女性を保護するなど、支援を必要とする女性が増えているにもかかわらず、売春防止法に法的根拠をおくことにより、支援につながらないという実態などがありました。従来の枠組みから脱却し、女性の自立と人権が保障される新たな制度や法律が必要だと、現場の支援者等からも強い要望があり、官民が一体となつて、学習会や検討会を重ねてきました。そして、2022年5月、支援を必要としている女性をより広く対象とし、自立を包括的に支援する「困難な問題を抱える女性への支援に関する法律」が成立し、来年2024年4月に施行されることになりました。^{※2}

「更生指導」から「福祉・権利擁護」へ

新しい法律の目的や基本理念には、「女性の福祉の増進」、「人権の尊重・擁護」、「男女平等の実現」といった視点が明確に規定されています。また、国や地方公共団体は、困難な問題を抱える女性への支援に必要な施策を講じる責務があることも明記されました。^{※3}

今後は、この法律の下で、「相談に来る方の状況は様々なので、ご本人の意思を尊重しながら、いろんな要素を勘案してそれぞれにあった個別の支援を充実させていきたい」と五十嵐さんは言います。当事者の立場に立った、女性の人権の尊重という点に配慮できる施設としての在

り方を常に模索しています。

「性暴力や虐待などに苦しむ女性が後を絶たないのは、女性の尊厳という意識が、社会の側に乏しいからではないか。根本的な問題は昔も今も変わらない」と天羽さんは指摘します。「社会全体を良くしていくためには、自分がされて嫌なことは人にはしないということが基本だ」と、五十嵐さんは訴えていました。支援を必要とする女性が生み出されないために、一人ひとりを尊重する意識が広く行き渡っていくことが必要と言います。

心身の健康回復のための支援を続けてきた現場の方々の思いは、新しい法律の施行を前に、より強くなっています。

インタビュー・執筆 山田真結（東京都人権啓発センター専門員）



天羽さん（左）と五十嵐さん（右）

※1 「かにた婦人の村」運営：社会福祉法人 ベテスタ奉仕女母の家 <https://www.bethesda-dmh.org/shisetsu/>

※2 厚生労働省「困難な問題を抱える女性への支援」に関する施策情報

https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kodomo/kodomo_kosodate/dv/index_00023.html

※3 困難な問題を抱える女性への支援に関する法律（令和四年法律第五十二号）

https://elaws.e-gov.go.jp/document?lawid=504AC0100000052_20240401_504AC0000000066

JINKEN note

Column | セサミストリートがナビゲートする、「インクルーシブシティ東京プロジェクト」を実施

セサミストリートと知る多様性の世界

セサミストリートが 東京都人権プラザに やってくる

東京都人権プラザは、2023年秋にリニューアル予定の特別展示で「セサミストリート」のキャラクターを展示のガイド役として起用します。今回は、「セサミストリート」の魅力を紹介しながら、東京都人権プラザが2023年度から3年間で取り組む、「多様性」を軸にした「インクルーシブシティ東京プロジェクト」の概要について説明します。

セサミストリートとは？

今回、東京都人権プラザにやってくるセサミストリートは、50年以上にわたって子どもたちを楽しませ、良質な教育を届けてきた子ども向けテレビ番組です。1969年にアメリカで生まれ、テレビを通して就学前の子どもの教育に貢献してきました。

セサミストリートが扱う内容は、識字能力や計算能力などの就学に向けた準備だけでなく、健康的な習慣、自己表現と自己規制、共感、友情など年齢に応じたコンテンツも提供しています。150以上の国と地域の子どもたちに届けられ、エルモ、クッキーモンスター、ビッグバード

などの象徴的なキャラクターは何世代にもわたり世界中のファンに愛されています。

「多様性」を意識したテーマ設定

日本でも人気のあるセサミストリートは、テレビ番組に留まらず、学習プログラムとして学校や自治体が活用しており、現在、小学校向けに「セサミストリートカリキュラム」が提供されています。

このプログラムは、セサミストリートのキャラクターとコンテンツを使用し、学校教科における学力の向上だけではなく、子どもたちの社会性や情緒的行動をはじめとした、生涯学習における基礎的な資質の育成を目標としています。

今回、東京都人権プラザがセサミストリートに注目したのは、「多様性」を意識したセサミストリートのテーマ設定です。セサミストリートが扱うテーマの中には、例えば、自閉症、家族の多様性、人種や文化、レジリエンス（忍耐力・回復）などがあり、貧困やトラウマと向き合っているキャラクターも登場します。子どもたちが日常生活の中で困難を感じたときに共感できるキャラクターとストーリーが魅力と言えます。

インクルーシブシティ東京 プロジェクトのガイド役として

東京都人権プラザは、東京都が掲げて

いる「インクルーシブシティ東京プロジェクト」の一環として、2023年度から3年間かけて事業を展開していきます。具体的には、特別展示のほか、人権尊重の意義を周囲に広げ、つなげていく「人」特に子ども・若者を育成することを目的としてユース世代向けと指導者向けの学習プログラムを実施します。

東京都人権プラザの特別展示では、子ども・ユース世代を中心に全世代が人権を学ぶための基礎的な取り組みとして、子どもの権利をテーマにした展示を展開します。多様性を魅力的に表現している「セサミストリート」のキャラクターをガイド役とすることで、子どもにも理解しやすい、親しみのある展示とします。

セサミストリートがナビゲートする「子どもの権利」、「多様性」を実感しに、東京都人権プラザにぜひご来館ください。



執筆 吉田 加奈子 (東京都人権啓発センター 専門員)

9月は東京都自殺対策強化月間です。

東京都では、9月を自殺対策強化月間として、「自殺防止！東京キャンペーン」を展開しています。期間中は電話相談の受付時間延長など、関係機関等と連携し、さまざまな取り組みを行います。**お問い合わせ** 東京都保健医療局健康推進課 TEL 03-5320-4310

話してみよう 糸口見つかるから

●こころの悩み等についての電話相談（期間中の特別相談）

東京都自殺相談ダイヤル～こころのいのちのほっとライン～

日 時 9月10日(日)～14日(木)(各日24時間)

電話番号 0570-087478



●日本のいのちの電話連盟

日 時 9月10日(日)(8:00～翌8:00)、9月10日以外(16:00～21:00)

電話番号 0120-783-556 (フリーダイヤル)

有終支援いのちの山彦電話 一傾聴電話一

日 時 9月の火・水・金・土・日・祝日(各日12:00～20:00)

電話番号 03-3842-5311

●自死遺族のための電話相談（期間中の特別相談）

全国自死遺族総合支援センター

日 時 9月11日(月)～13日(水)(各日10:00～20:00)

電話番号 03-3261-4350

グリーフケア・サポートプラザ

日 時 9月5日(火)～8日(金)(各日11:00～16:00)

電話番号 03-3796-5453

※東京都の「自殺防止！東京キャンペーン」についての情報は、
こちらの特設ページでもご案内しています。

心と体を傷つけられて
亡くなった天国の子供たちのメッセージ展

奪われた子供たちの命について思いをめぐらすとともに、子供たちの命を守っていくために、一人ひとりが自分たちにできることを考えていただく機会とします。

日 時 ① 2023年9月1日(金)～8日(金)
8:45～21:30 (8日は15:00まで)
② 2023年9月12日(火)～23日(土)
9:30～17:30 (日曜休館)
会 場 ① 多摩平の森ふれあい館3階(日野市多摩平2-9)
② 東京都人権プラザ ロビーギャラリー
(港区芝2-5-6 芝256スクエアビル1階)

子供

第2回 人権問題都民講座

「ステレオタイプ・偏見との向き合い方ープリンセス像や
血液型占いと無意識の思い込み(アンコンシャスバイアス)」

身近な題材を手がかりに、人はなぜ「偏見」を抱くのか、先入観が修正されるメカニズムなどを社会心理学の観点から学び、お互いに歩み寄る方法を考えます。

日 時 2023年9月29日(金) 18:30～20:30
講 師 上瀬 由美子(立正大学心理学部教授)
申込締切 2023年9月22日(金)
定 員 会場60名、オンライン(Zoom) 200名

東京都人権プラザでは、4種類の人権相談を実施しています

土日祝を除く・全て無料

- ① 一般相談 電話(月～金) 面接(月・水・金)(面接・要予約)
- ② 法律相談(火)(面接・要予約) 第4火曜のみ電話相談
- ③ 「インターネットにおける人権侵害」に関する法律相談(木)(面接・要予約)
- ④ 新型コロナウイルス感染症に係る人権問題に関する専門電話相談(月～金)

※面接の相談時間 40分以内

※「インターネットにおける人権侵害」に関するSNS(LINE)相談(10月開始予定)

相談時間 ①④ 9:30～17:30 ②③ 13:00～16:00
電話番号 ① 03-6722-0124
② 03-6722-0126
④ 03-6722-0118

面接予約の電話番号は全て 03-6722-0124

※相談時間、受付方法等の詳細は、こちらからご覧いただけます。



東京都人権プラザ(指定管理者:(公財)東京都人権啓発センター) 港区芝2-5-6 芝256スクエアビル TEL 03-6722-0123

(公財)東京都人権啓発センター賛助会員募集のご案内

皆様とパートナーシップを築き、人権意識の高揚、人権問題の解決に向けて、ともに手を携えてまいりたいとの趣旨から「賛助会員制度」を設けております。趣旨にご賛同いただき、是非ご加入下さい。

団体会員の皆様

(公財)東京都農林水産振興財団
(公財)東京都中小企業振興公社
(株)首都圏環境美化センター
(一財)東京都人材支援事業団
東京都中小企業団体中央会
(公財)東京都障害者スポーツ協会
(一財)東京都つながり創生財団

東京都下水道サービス(株)
(公財)東京都歴史文化財団
(一財)東京都営交通協力会
(一社)東京都信用組合協会
(一社)医療大麻dotオルグ
(公財)東京都福祉保健財団
(公財)東京都学校給食会

(一社)東京環境保全協会
東京臨海高速鉄道(株)
(株)東京エイドセンター
(公財)東京しごと財団
東京交通サービス(株)
東京都人権啓発企業連絡会
多摩都市モノレール(株)

東京都職員信用組合
東京都商工会連合会
(株)東京ビッグサイト
(公財)東京観光財団
(公財)東京税務協会
東京都立大学法人
(一財)東京都弘済会

東京都住宅供給公社
自治労東京都本部
東京食肉市場(株)
東京港埠頭(株)
(株)ゆりかもめ
東京都競馬(株)
(順不同)

個人賛助会員 一口 2,000 円

団体賛助会員 一口 30,000 円

問い合わせ TEL 03-6722-0083

((公財)東京都人権啓発センター 企画広報課まで)



編集後記 | 安堂ほせさんの新作『迷彩色の男』を拝読しました。クライム・サスペンス的でありながら、そのようなジャンルの枠組みにおさまらないのは、「事件」の語り手の視点や、「いま、ここ」にある差別や悪意を痛切に感じているからであり、読者にもその鋭い痛みが伝播してくるからでしょうか。自らの鈍感さに対峙しながらも、どきどきしてページをめくる手が止まらない(部分的にはどきどきしすぎて止まるところもある)、鮮烈な読書体験でした。(村上)

Vol.99 2023年秋号 2023年8月31日発行(年4回発行)



マルチメディアDAISY版を作成しています。ご希望の方は(公財)東京都人権啓発センターまでお問い合わせください。「DAISY(デージー)」とは、視覚障害などさまざまな理由で活字を読むことが困難な方のための、デジタル図書です。

この冊子は再生紙を使用しています。本誌の無断転載はお断りします。本誌を研修等でご利用の際は出典をご明記ください。

誰もが幸せを実感できる社会へ

TOKYO人権

制作 株式会社ブックマーク

発行 公益財団法人 東京都人権啓発センター

〒105-0014 港区芝2-5-6 芝256スクエアビル2階

TEL 03-6722-0085 FAX 03-6722-0084

https://www.tokyo-jinken.or.jp/